「Edwin B. Dozier の日本のバプテスト教会状況報告（1946 年）分析」について

斎藤　剛毅

私が「Edwin B. Dozier の日本のバプテスト教会状況報告（1946 年）分析」を 1978 年 7 月発行の「西南学院大学神学論集」に執筆したのは、旧西部組合系のバプテスト教会に関する戦中、戦後の状況を知ることのできる貴重な資料であることを公にしたかったからである。この「報告」には、1946 年 11 月 23 日に行われた福岡会議で語られたアメリカ南部バプテスト連盟外国伝道局からのドージャー使節のメッセージが載せられており、また会議への出席者、そして 18 教会と 2 伝道所の状況が報告されている。

その報告には、⑴空爆によって焼失した 10 教会、⑵取り壊しを受けた 3 教会、⑶残存している 7 教会の戦時中の様子が、ドージャー使節が九州に赴き、教会および伝道所の代表者と直接面談し、メモした内容が記述されている。戦時中の牧師の状況、朝・夕の礼拝、祈祷会の出席状況、会堂の状況を知ることのできる唯一の記録である。

福岡会議の後、1947 年 4 月 2、3 日の両日、旧西部組合系教会代表者 23 人が西南学院教会に集合し、2 日に連盟結成準備会をもち、3 日に「日本バプテスト連盟」結成総会を開き、満場一致で連盟結成を決議した。この連盟の発足に際して、Edwin B. Dozier が果たした重要な役割は、歴史の進行の中で忘れられてゆく可能性がある。彼の働きを覚え、正しく評価することは私たちの務めであると思って、翻訳し、活字化した。

「Edwin B. Dozier 伝」（第 2 版）の刊行は、西南学院のバプテスト資料保存・運営委員会の委員長、金丸英子先生と委員の方々の企画と努力に基づくもので、私が 1986 年にヨルダン社から出版した『神と人とに誠と愛を～ E. B. ドージャー先生の生涯とその功績～』が中心に据えられ、E. B. ドージャー先生の年表と先生が残された貴重な文献が加えられ、生前の数多くの写真が取り入れられた。また、先生と深い関わりを持たれた 3 人の牧師先生の回顧文、そして、お子さんたちの「父を語る」の文章は、「Edwin B. Dozier 伝」（第 2 版）の内容を色彩豊かなものとしている。なお、このたびの『西南学院アーカイヴズ』の誌面には、詳細なドージャー年表が付加されて、資料としての価値が高められている。

Edwin B. Dozier の日本のバプテスト教会状況報告（1946 年）分析

解説・訳　斎藤　剛毅

解　説

1945 年（昭和 20 年）8 月、太平洋戦争終了後、アメリカ南部バプテスト連盟の外国伝道局は、日本のバプテスト諸教会の事情視察のために、また新しい教団設立の可能性を求めて、使節を日本に派遣することを決議した。使節として選ばれたのは、宣教師として戦前日本で活躍し、戦時中はハワイのホノルルを中心に日本人伝道に打ちこんでいたエドウィン　B. ドージャーであった。アメリカ政府から日本への渡航許可が下りたのは 1946 年 7 月 18 日であり、ドージャーの乗った船がテキサス州ヒューストンの港から出航したのは 9 月末のことである。

ドージャーが神戸港についたのは 10 月 30 日であった。彼は東京に直行し、熊野（ゆや）牧師の家に滞在した。それから、九州の旧西部組合系（南部バプテスト系）の諸教会代表と会うために、また諸教会視察のために旅立っていったのである。「私の九州への旅は、日本における南部バプテストの宣教活動が再出発するか否かを決する重要なものであった」と外国伝道局への報告書の中で述べているように、ドージャーはこの旅において果たさねばならない自分の使命の重さを自覚していたのである。

暖房のない夜行列車に、ひざを枕に 30 時間揺られて門司駅についたドージャーは、三善敏夫牧師と菅野救爾氏に温かく迎えられ、それから小倉の西南女学院に急行した。原松太院長と固い握手を交わした彼は、父 C. K. ドージャーの墓前で感謝の祈祷を捧げたのだった。

1946 年 11 月 23 日、ドージャー使節の要請に応えて、旧西部組合系の教会に属していた九州地区の牧師または教会代表が、福岡の西南学院に集合した。教授会議室で開かれた福岡会議での席上、ドージャーはアメリカ南部バプテスト連盟の意向を情熱をこめて語ったのである。会議の性格上、直ちに新しい宗教団体を結成するということができなかったことは言うまでもない。会議で討議されたことが、各教会で報告され、日本基督教団から離脱するか否かを決議する必要があった。しかし、散会する前に教会代表たちが確認したことは、第一に彼らがバプテストとして、バプテストの伝統に沿って今後も進むということ、第二は日本基督教団から離脱の行動を取るまでは現状を維持すること、第三は南部バプテストの伝道は九州に限定すべきではないということであった。そして、翌年 4 月に再会することを約束して彼らは散会したのである。

ドージャーはその後、学院関係者や教会関係者と面談し、教会を問安し、11月27日に東京に向かって福岡を発っている。東京の熊野牧師の家に落ち着くと、ドージャーは *Report to the Foreign Mission Board of the Southern Baptist Convention*（『アメリカ南部バプテスト連盟外国伝道局へのレポート』）を書き始め、12月12日にタイプ用紙29枚の長さにまとめて完成している。このドージャー・レポートは旧西部組合系のバプテスト教会に関する戦中、戦後の状況報告を含んでいるゆえに貴重な資料なのである。

筆者はドージャー・レポートの中から、11月23日の福岡会議における彼のメッセージと、諸教会の状況報告のみを選び、翻訳・紹介することにした。状況報告は面談の折りにメモし、後にレポートにまとめたものであるから、記述内容に誤謬が全くないという性格のものではない。しかし、日本において当時の総合的な記録が残されていないことを知る時、ドージャー・レポートの価値は大きいことを覚える。なお、この報告書の使用と翻訳の許可は、筆者が1970年秋にE. B. ドージャー夫人（ママ）を通して外国伝道局から得ているものである。

Ⅰ．ドージャー使節のメッセージ（1946.11.23）：資料

「アメリカの南部バプテストは、日本において福音を宣教するように神からの召命を受けました。それゆえに、わたしたちはクリスチャン或いはノンクリスチャンを問わず、日本の兄弟姉妹たちがわたしたちを招いて下さるのをじっと待つことは致しません。しかし、わたしたちはかつての同労者たちと、しっかり手を握り合って日本における宣教事業を推進したいのです。

わたしたちが日本にやってくる第一の目的は、キリストを宣教することであって、教派を前進させることではありません。しかし、これから福音宣教を実践してゆくに当たって、過去に築き上げたわたしたちの教派的協力関係を用いること以上の良策はないと思うのです。わたしたちが事に当たるとき、自分が正しいと信じる基本的信仰内容の妥協を余儀なくされて、初心を貫けないのではないかという恐れをもって事に当たることはできません。わたしたち南部バプテストは、一つの統合的プロテスタント教会の形成を試みる連合教会会議の一部になることを拒絶しましたが、その時、次のような基本的理由を述べました。

(1) わたしたちは聖書が神の霊感を受けて書かれた神の言であることと、聖書の無謬性を否定する者とは組織的に一つとなることはできない。

(2) わたしたちは神の三位一体性とキリストの神性を否定する者と結合することはできない。

(3) わたしたちは聖書以外に信仰と実践の規範を認めるような者と一致することはで

きない。

(4) わたしたちはキリストの十字架における犠牲的死と、体の復活によって可能となった恵みの出来事としての救いを信じようとしない者と一つになることはできない。

(5) わたしたちは教会が（古い自分が死に、新しい自分に甦ったという）内的な体験を象徴する浸めのバプテスマにあずかり、教会の交わりと義務を果たすようになった信者、即ち新生した信者によってのみ構成されるべきであると信じる。それ以外の教会構成を受け入れることはできない。

(6) わたしたちは地方教会の自治と独立の権威、また民主的教会政治の実践をおびやかすような、いかなる形態の組織をも拒絶せざるをえない。

南部バプテストの歴史において、今日ほど信教の自由の原理の下に、他のクリスチャンたちと喜んで協力することが可能となった時代はありません。しかし、わたしたちの内なる確信を捨てて妥協してまで、協力すべきだとは思わないのです。

わたしたちが日本で願うことは、同じ信仰をもつ人々と共に協力し合い、一つの団体が他の団体を支配するということなしに、兄弟姉妹として互いに仕え合うことです。福音の宣教は日本人の計画でも、アメリカ人の計画でもなく、神の計画であります。日本とアメリカの信者は、時間と財産と自分自身を献げて、神のご計画実現のために努力すべきではないでしょうか。神の前に平等な者同志として、わたしたち主の働き人は神に用いられる場所をもっていますが、この世において努力するとき、神の命令を最も有効に果たすために、わたしたちの最善の方法と人を選んで事に当たるべきではないかと思うのです。[1)]」

---

1) 1946年11月23日、福岡会議で語られたE. B. ドージャーのメッセージは『外国伝道局へのレポート』の中の第1部「日記の中から」と題したところに記述されているものである。ドージャーは彼のメッセージの後に立ち上って語った山永教授の言葉をさらに次のように記述している。「南部バプテストは日本人の招きを待たずして神の召命を聞いたゆえに、また天から示された幻に従順であるために、日本にやってくるのだとあなたが言われた時、私の心は喜びに震えました。それこそ今日私たちが必要としている精神なのです。私は外国の多くの伝道局が、日本基督教団の指示を待っていると聞いてがっかりしていました。わたしたちが立つべき権威の基盤を示して下さって本当に有難うございました。」

なお、ドージャーは福岡会議の出席者を次のように記録している。「出席者は荒瀬鶴喜師（出席不可能な息子の代理）、熊野清樹師、福岡教会の大村匡氏、麦野七右衛門師、藤井泰一郎氏、西南女学院の原氏、伊藤氏、塩川氏、三善敏夫師、山永教授（熊本のノーマン・ウィリアムソン博士のバイブル・クラスから導かれ、長老教会に出席し、当時西南学院専門学校の教授）、菅野救爾師、宮地治師、松村秀一師、河野貞幹教授、尾崎主一師、黒田政治郎師の息子（父親の代理）、藤沢繁師であった。欠席した牧師は下瀬加守師（引退）、黒田政治郎師、富田芳蔵師、木村文太郎師、松平豊師、日笠進二師、そして荒瀬昇師である。」（Edwin B. Dozier, *Report to the Foreign Mission Board of the Southern Baptist Convention,* p. 8.）

Ⅱ．ドージャーの諸教会の報告（1946.12.12）：資料

1. 東京　目白ケ丘教会（元小石川駕籠町教会）熊野清樹牧師

戦争勃発後、学生たちは徴兵や工場への学徒動員によって減少し、学生寮は閉鎖されました。幼稚園も暫くの間続いていましたが、家族の疎開などによって継続不可能となり、その結果、教会の敷地の隣りにあった海軍管轄の理研化学は、教会の土地、建物を買収したいと要求してきました。熊野牧師は策をつくしてその要求を拒もうとしたのですが、頑固に拒絶すれば、政府の名において財産の強制没収という事態が生じる恐れもあり、そうすれば教会の全財産を失う危険がありましたので、最終的に40万円で売買の契約が成立しました。そのうち10万円は西南学院の宣教師住宅のために送られ、12万円で現在の土地、牧師館が買われ、17万円は（会堂建築などの）将来の必要経費のために貯えられ、1万円は牧師が教会から支えられなくなるような緊急事態に備えて貯畜されました。1945年3月に不動産の売却がなされた後に、東京に大空襲があり、小石川の教会関係の旧い建物は全焼してしまいました。

目白への引越の後、熊野牧師は栄養失調で健康を損なっていました。教会員は戦時中に散ってしまい、居所が分からないような状態の中で、彼と家族はごくわずかな献金に支えられて生活していたのです。暫くの間牧師一人は御殿場に行って静養につとめ、戦争が終るとアメリカの従軍牧師やクリスチャン兵士の善意で食糧を供給され、彼はやっと健康を回復しました。

新しい住居に礼拝の場を移した時点で、熊野牧師は日本基督教団の霊的行きづまりを洞察して、教団から離脱しました。この教会は日本の法律が保障する信教の自由の下で、一つの独立したバプテスト教会として存在しています。日曜の礼拝出席は15人から25人位で、教会員は交通の便が悪い中をやって来ます。日曜学校はハワイ二世のバプテストで、アメリカ空軍の兵士、サム・タマシロの活躍で約80人の出席があります。

2. 東京　西巣鴨教会　富田芳蔵牧師

アメリカとの開戦後、牧師館は権威筋からの命令により、火災予防という理由で取り壊されてしまいました。牧師家族は田舎へと疎開しましたが、教会の幼稚園教師であった娘さん一人が残って教会を守っていましたが、教会は空襲で全焼してしまいました。疎開のために運んだものを除いて一切の財産は失われました。牧師の全家族は現在、立教大学の近くの豊島区に住んでいます。教会として礼拝室を兼ねた牧師館新築のために17万円をもっていますが、建築費として充分であるかどうかは分かりません。礼拝は家族以外に3人から5人の出席です。教会員は散ってしまっています。

強力な会員であった荒川直三氏が八幡教会へと移られましたので、牧師は子供たちの収入で生活しています。

3. 呉教会　高橋循雄牧師（死亡）[2)]

教会と牧師館は全焼したと聞きました。呉からの代表は見えませんでした。土地は再出発のために確保されているようです。

4. 広島　千田町教会　木村文太郎牧師

九州での会議の折り、木村牧師はハブ[3)]での集会のため不在でした。杉本氏は原爆により牧師館の一つの部屋を除いて、広島教会の全てが破壊されたと報告しておりました。木村牧師は古材を用いてもう一つの部屋を造り、家族と兄弟の奥様と一緒に住んでおられるとのことです。彼らは原爆投下の時、田舎にいて皆無事でした。……宣教師館は戦時中に売られて、6万円は西南学院に送られました。礼拝は行われているようですが、出席状況は明らかではありません。

5. 下関教会　松平豊牧師（兼牧）

終戦まで末崎師が牧師でありましたが、高校の教師となるために牧会から去られました。教会は存続してカワラモトさんの管理の下で礼拝が守られました。教会と牧師館は残っています。松平牧師が（瀬戸田教会から）門司教会に赴任された時、下関教会を兼牧なさることを同意されました。宣教師住宅と財産は売却され、基金は西部社団法人に入れられて、諸教会の必要のために用いられました。20人から25人の朝礼拝出席、聖歌隊練習、英語クラス、文学研究グループなどがあります。

6. 門司教会　松平豊牧師

松平牧師は1942年（昭和17年）に瀬戸内海伝道から門司伝道に召命を感じて赴任されました。戦争が進むにつれて生活を支える場は幼稚園となってゆきました。焼け出されるまで、彼は牧師館における礼拝を決して止めようとはしませんでした。教会堂は終戦前に取り壊されてしまいましたので、教会員が一つの場所に集うことができなくなった時、彼は信者の家をめぐって、日曜日に5、6回の礼拝を守ったそうです。……セヴンスデー・アドヴェンティスト教会の牧師が刑務所につながれた時、松平牧

2）高橋牧師は1945年3月9日、郷里の姫路で永眠された。
3）氏名及び地名の書き方が不明のものはカタカナで表現した。

師一人が彼を獄中に訪ね、彼の家族の世話をしたのでした。牧師館が焼けると牧師家族は西南女学院の敷地内に建てられた陸軍の簡易住宅に移り住みました。そのため門司会衆はYMCA会館でメソジスト派、改革派、その他の宗派の人々と礼拝を共にしました。二家族の献げる献金は、松平牧師の家族を支えるには不充分であり、現在牧師はアメリカ占領軍基地で通訳として働いています。現在、門司では礼拝は行われておりません。恐らく近いうちに後藤氏あるいはスガナカ夫人の家で礼拝が守られるようになるでしょう。

7. 小倉教会　菅野救爾牧師

戦争勃発後、片谷牧師は教会を辞任して、組合派教会の牧師となるために上京しました。沢野正幸師が牧師となり、彼の指導の下に清水会衆も小倉教会に合併しました。なぜなら金子哲雄牧師が療養のため田舎に帰らねばならなかったからです。残念ながら彼はそこで亡くなりました。終戦前に教会と牧師館は取り壊しを命じられ、沢野牧師はやむなく辞任して瀬戸内海伝道の召命に応えることになりました。会員は大切な家財や備品をメソジスト教会にあずけ、二か月間一緒に礼拝を守りましたが、大和兄と橋本兄は満足せず、橋本兄の家は市の郊外にありましたが、彼の家に10人から15人が日曜日毎に集まりました。菅野救爾師が西南女学院で教えはじめると、彼は一信徒として日本基督教団から離脱するまで、礼拝説教をすることを承諾しました。

8. シオン山教会　三善敏夫牧師

西南女学院が建っている丘陵地からの撤去を陸軍から命じられた結果、女学院教会での礼拝は原松太院長の家に移って行われました。[4] 三善牧師が応召してセレベスに行かれてからは、原氏がその群を守りました。丘陵地が軍部から解放されると会衆は音楽校舎のチャペルに集い、30人から50人が毎日曜に集っています。出席者の殆どは女学院の教師とその家族です。土曜日が宗教強調日になっており、全校が日曜学校のようにクラス・ルームで、聖書の学びと礼拝の時をもつのです。そのためか女子学生は日曜には食事の世話なども重なって余り礼拝に出席しておりません。

4）筆者が当時西南女学院で教えておられた塩川和雄氏と1978年6月9日、面談、録音した折り、女学院が丘陵地からの撤去を余儀なくされた時、授業は疎開先の学校で続けられ、また礼拝は原院長の家ではなく、空いている教室で守られたという事実を塩川氏は語られた。

9. 八幡教会　三善敏夫牧師（兼牧）

戦争開始後、暫くの間、荒瀬昇師が牧師として伝道牧会に当たっておられましたが、応召して入隊後、彼の父が牧会を継続し、彼の妻（黒田政治郎牧師の娘）が幼稚園の主事として働きました。教会は爆撃を受け、彼らは財産を失ってしまい、礼拝は植木隅氏の家で行われました。戦争終了後、荒瀬牧師は帰国されたのですが、熊本教会からの招聘を受けて赴任されたために無牧となり、植木氏と荒川直三氏が教会を支えつつ、三善牧師の兼牧を依頼しました。宮地治師を牧師として招聘しているとのことです。礼拝出席は 10 人から 15 人ほどです。

10. 戸畑教会　日笠進二牧師

開戦後しばらく教会は万事いつもと変わらず順調に進んでいましたが、日笠牧師が海軍に応召して後、教会は彼の妻の指導の下に持ちこたえました。戦後牧師は帰国しましたが、9 か月は病気のため牧会に立てませんでした。教会員だけで牧師家族を支えることは不可能なために、牧師は現在のところ占領軍のために働いています。教会は爆撃からまぬがれ、5、6 人の出席で礼拝が守られています。隣光舎は残っており、プログラムに関する限りでは市の社会福祉課に併合され、市によって現在使用されています。

11. 芦屋伝道所　無牧

芦屋飛行場一帯はアメリカ軍に占領されており、北部バプテストの従軍牧師が日本人のために礼拝を始め、30 人から 40 人がいつも出席しています。彼は何人かの日本人協力者を得て集会をしています。そして、その地域に影響力のある一人が受浸しています。交通の不便と信者の不在のため、専任の働き人を送ることは不可能です。神が備え給わんことを祈っています。

12. 福岡城北教会（以前は簀子町教会）無牧

開戦後数年間は下瀬牧師が、菅野兄弟の助力を得て牧会に当たっておられましたが、空襲の危険から避けるために、食糧事情の良い久留米に引越されました。菅野氏は 1944 年まで教会の責任を負いましたが、良心的に日本基督教団にそれ以上長く留まることができず辞任しました。西南学院に来られた副田師が、短い間でしたが教会を助けられました。しかし、2 年以上も教会は無牧の時を過ごしたのです。会堂の焼失後は、杉本氏と大村氏が交代で彼らの家で礼拝を守りました。杉本氏が選挙に出馬後は、家庭での礼拝が困難となり、児童教育科の建物内で西南学院の山永教授の指導

の下で朝の礼拝が行われ、夕礼拝に出席したい者は西南学院教会に出かけました。教会は牧師を求め、教会の再建を考えています。

13. 西南学院教会　尾崎主一牧師

戦争が始まってすぐに影響を受けたのは夕拝でした。次に日曜学校の休止を余儀なくされました。かなりの出席者のあった朝礼拝は 12 人以下に減少しましたが、戦時中の緊張の中を休止することなく続けられました。教会堂は軍隊によって占拠されてしまい、礼拝はやむなく牧師館の２階で守られました。尾崎牧師は郷土の軍務に召集を受けて赴かれ、家族は仙台の近郊に疎開されました。教会は水町家、藤井家、河野家その他の家族によって支えられました。終戦直後、教会は夜間英語クラスを開いて、尾崎師と河野師がその企画を指導しましたが、100 人近い学生が出席しています。日曜学校は夏から藤井泰一郎氏の指導の下に復活し、出席は 90 人以上です。日曜礼拝は朝 60 人から 80 人、夕は 20 人から 30 人の出席です。

14. 佐賀伝道所　宮地治牧師

宮地師は本国帰還後、故郷の佐賀の町に、お母様と一緒に住んでいます。彼は町や田舎で説教し、聖書を教えています。彼は可能な限りこの仕事を続けたいと願っています。[5)]

15. 大牟田教会　松村秀一牧師

松村牧師が応召された後、熊本教会の牧師、黒田政治郎師が大牟田教会を兼牧、世話されましたが、集会場の借家は（空襲で）焼失してしまいました。戦後黒田牧師は熊本教会を辞任なさり、松村牧師が帰任される迄、大牟田教会を助けました。[6)]

16. 熊本教会　荒瀬昇牧師

戦時中、黒田牧師が熊本の群を牧会しましたが、平和が訪れると引退されました。教会は荒瀬昇牧師を招聘しましたので、彼はお父様と一緒に赴任され、その後積極的な伝道を展開し、50 人から 60 人の朝礼拝、20 人から 30 人の夕礼拝を守っています。水曜の聖書研究祈祷会には 10 人から 15 人の出席があります。火曜の晩には信者の家

5）宮地牧師は 1948 年、加瀬康作氏宅を集会場とする八幡教会に赴任し、その後佐賀伝道は加来国生師によって行われることになった。

6）筆者が松村師と 1978 年 6 月 18 日に面談、録音した時、松村牧師は戦後帰任されるまで、河野貞幹師が大牟田教会を助けられたと語られた。

で集会が開かれています。

17. 佐世保教会　無牧

大島邦雄牧師が召集を受けて教会を去って以来、教会には指導者がおりませんでした。戦後、彼は関東学院での教育の仕事を引き受けました。会堂は焼失しましたので、教会員は他のプロテスタント教会で礼拝を守っています。

18. 長崎教会　藤沢繁牧師

他の教会と同じように、教会と幼稚園の事業は縮少を余儀なくされました。宣教師館は売却され、法人を通して弱少教会の援助に当てられました。藤沢牧師は長崎海軍の軍務に召集されたため､教会のために働くことは殆どできませんでした｡原爆によって会堂の屋根は破壊され、窓ガラスは粉砕され、しっくいは剥げ落ちました。その他は大丈夫でしたが、かなりの被害を受けています。戦後、牧師は造船会社で働きながら家族を支えています。日曜礼拝は少数ですが続けられています。

19. 伊集院教会　麦野七右衛門牧師

麦野師は幸運にも戦時中の緊張に富んだ年月、中断することなく伝道牧会を続けることができました。そして夫人と共に守った幼稚園事業は地域の人々から喜ばれました。日曜礼拝の出席は戦争の間低下しましたが、現在は約 10 人の出席があります。30 人の子供たちが日曜学校に出席し、50 人の幼児が在園しています。麦野牧師は公立の学校でも聖書の教えを要望されているそうです。彼は長い間借りていた借家から立ちのかねばならぬ問題に直面しています。小さな土地はありますが、会堂はありません。

20. 鹿児島教会　無牧

谷広牧師が去って以来、教会は無牧です。残された教会員は他のプロテスタントの教会で礼拝を守ってきました。麦野牧師が教会の財産の世話をしてきましたが、会堂は空襲で焼失しました。下瀬老牧師は鹿児島から遠い所に住んでいて、助けることは不可能です。

以上が E. B. ドージャーによる「諸教会の報告」の全訳である。これは『外国伝道局へのレポート』の 13 頁から 18 頁に記述されているものであるが、教会報告の最後に「中断された伝道地」として、行橋（ゆくはし）、大分、若松、久留米、宮崎、富江があげられ

ている。

Ⅲ．ドージャー・レポートの分析

1. メッセージの分析

1946 年 11 月 23 日の福岡会議におけるドージャー使節のメッセージを、要約すると次のようになる。

(1) アメリカ南部バプテストの日本における宣教は、神からの召命であるゆえに、日本からの招聘を待つことはしない。

(2) 日本における宣教の目的は、教派の前進ではなく、キリストの宣教であるが、宣教の実践に当たって、かつての苦楽を共にした仲間と協力する以上の良策はない。

(3) アメリカのバプテスト教会は、聖書観、神観、キリスト観、救済観、教会観（礼典と教会政治）を異にする信仰共同体とは、内なる確信を捨てて妥協してまで協力することを拒絶した。

(4) 福音宣教は神の計画であるから、平等で対等な立場で、最善の協力関係を樹立して、事に当たりたい。

ドージャーはメッセージの中で、日本基督教団を直接的には批判していない。しかし、「あなたがたが、もし日本基督教団に留まろうとするならば、バプテストとしての信念を曲げて、妥協することになるのではないか」という暗黙の問いを投げかけていたことは否定できない。バプテスト主義信仰をかかげて、日本基督教団から離脱して再出発し、宣教の領域を日本全土に拡大し、協力し合いながらキリストによる日本救済に乗り出そうというドージャーの願いと祈りがにじみ出たメッセージであったと言えるのである。福岡会議において、ドージャーと思いを一つにして、新しいバプテスト教団の結成に情熱を燃やしたのは（松村秀一牧師や荒瀬昇牧師との面談によると）、東京の熊野清樹師と福岡の河野貞幹師であった。そして両師の協力と祈りなしには、ドージャーの願いは実現しなかったかもしれないが、いずれにせよ、11 月 23 日のメッセージに凝縮されたドージャー使節の意向は、翌年の 4 月 3 日における日本バプテスト連盟結成への道を拓いたという意味で、重要な意義をもつものである。

2. 諸教会報告の分析

ドージャーによる Report of the Churches を分析すると次の点が明らかにされる。

(1) 空襲による焼失教会――東京駕籠町、西巣鴨（会堂）、呉、広島、門司（牧師館）、八幡、福岡簀子町、大牟田（借家）、佐世保、鹿児島　以上 10 教会。

(2) 取り壊しを受けた教会――西巣鴨（牧師館）、門司（教会）、小倉（会堂･牧師館）以上3教会。〔西巣鴨と門司は空襲も受ける〕

(3) 残存教会――下関、シオン山、戸畑、西南学院、熊本、長崎（被害あり）、伊集院（借家）以上7教会。

ドージャーが報告している18教会の中、焼失、或は取り壊し（強制疎開）により、会堂・牧師館を失ったのは11教会であり、7教会のみが焼失をまぬがれている。

報告されている18教会の中で、峯崎康忠編『日本バプテスト連盟史(1889－1959年)』に教会組織が記録されているのは、下関（1894年?）、福岡簀子町（1901年）、熊本（1902年）、長崎（1902年）、佐世保（1902年）、小倉（1903年）、鹿児島（1903年）、八幡（1909年）、小石川駕籠町(1918年)、シオン山(1922年)、西南学院(1922年)、西巣鴨(1925年)、呉（1934年）の13教会であり、広島、門司、戸畑、大牟田、伊集院がいつ教会を組織したかは不明である。このうち、大牟田と伊集院には未だ教会堂は建てられてはいなかったのである。従って、ドージャー報告の中に伝道所として記載されている芦屋、佐賀の2伝道所とこれら5教会がどのように区別されているのかと言うと、芦屋は従軍牧師により、佐賀は宮地牧師により、戦後開始された伝道地として考えられ、区別されていたことが分かるのである。

教会報告の中に登場してくる牧師の名前は、熊野清樹（駕籠町→目白ヶ丘）、富田芳蔵（西巣鴨）、高橋循雄（呉、死亡）、木村文太郎（広島）、末崎（下関→高校教師）、松平豊（門司、下関〔兼牧〕）、菅野救爾（小倉）、片谷武雄（小倉を辞任→他教派牧師として上京）、金子哲雄（清水集会、死亡）、沢野正幸（小倉→瀬戸内海伝道）、三善敏夫（シオン山、八幡〔兼牧〕）、日笠進二（戸畑）、尾崎主一（西南学院）、下瀬加守（福岡）、副田正義（福岡）、宮地治（佐賀）、松村秀一（大牟田）、黒田政治郎（熊本）、荒瀬昇（熊本）、大島邦雄（佐世保→関東学院）、藤沢繁（長崎）、麦野七右衛門（伊集院）、谷広虎三（鹿児島辞任）である。

これらの牧師のうち8人（三善、日笠、副田、尾崎、荒瀬、松村、藤沢、宮地）が応召して軍務に服し、6人（高橋、金子、末崎、片谷、大島、谷広）が死亡その他の理由で、バプテストの伝道牧会の世界から去り、2人（富田、下瀬）が疎開を余儀なくされ、6人（熊野、木村、松平、沢野、麦野、黒田）だけが、戦時中も困難の中を牧師として仕事を継続することができたのである。ドージャー・レポートはこのような事実を明らかにする貴重な文献である。

結　語

1947年（昭和22年）4月2、3日の両日、旧西部組合系の教会代表者23人が、西

南学院教会に集合し、2日に連盟結成準備会をもち、3日に「日本バプテスト連盟」結成総会を開き、満場一致で連盟結成を決議した。代表者を送った16教会は、目白ヶ丘、西巣鴨、呉、広島、下関、門司、小倉、シオン山、八幡、戸畑、福岡、西南学院、大牟田、熊本、長崎、伊集院である。鹿児島と佐世保の2教会は、教会堂、牧師館共に焼失し、牧師は不在（無牧）であり、信徒たちは他教派の教会に出席していたので、代表を送ることは実質的に不可能であったのであろう。

「日本バプテスト連盟」結成に先立つ約6か月前、即ち1946年10月、日本基督教団は、年次総会において、公式に教団自体が「教会」であることを確認し、教憲、教規と信条を採択した。新しく誕生した「日本バプテスト連盟」は、教団の教会観、教会政治のあり方、信条をもつこと、幼児洗礼の肯定などに対して、明白に否を述べて、歴史の中で守り抜いてきたバプテスト主義に固執して、バプテスト信仰を貫徹することを決意したのである。

この連盟の発足に際して、Edwin B. Dozierの果たした重要な役割は、歴史の進行の中で忘れられてゆく傾向にある。しかし、彼の働きを正しく認識し、評価することは、バプテスト主義を継承してゆくわれわれの務めであると思うのである。

（『西南学院大学神学論集』第36集、昭和53年7月発行）

E.B.ドージャー（Edwin Burke Dozier, 1908-1969）年表

※著作物関係の記載は、原資料を確認できたものにとどめている。
※寄稿関係の記載は、原則として西南学院関係の刊行物とし、バプテスト関係の刊行物への寄稿は主要なものに限定している。

年	月日	事　　項
1908	4月16日	父チャールズ K. ドージャー（西南学院創立者）と母モード B. ドージャーの長男として長崎市出島で生まれる
	月日不詳	生後6か月で福岡市養巴町（現在の福岡市中央区大名）に移り、幼・少年期を過ごす
1910	6月10日	妹ヘレン・アデリアが神戸で生まれる
1913	月日不詳	母 M. B. ドージャー指導のもと、カルヴァード・スクール・システムによる自宅教育を受ける（1921年まで）
1916	2月15日	父 C. K. ドージャーが西南学院を創立する
1918	月日不詳	学院校舎建設時に発見された元寇防塁遺構の発掘に居合わせる
1920	9月12日	福岡バプテスト教会でバプテスマを受ける
1921	8月	米国ジョージア州のゲインズヴィル高校で学ぶ（1922年8月まで）
1922	8月	日本に戻り、神戸市のカナディアン・アカデミー（高校）に入学する（1926年6月卒業）
1924	11月	日本で宣教師として働く決心をする
1926	8月	大学入学のため帰米する
	9月	米国ノース・カロライナ州のウェイクフォレスト大学に入学する
1927	12月	ウェイクフォレスト大学で説教師の資格を取得する
1929	月日不詳	ウェイクフォレスト大学を卒業（B.A.）し、同大学院で学ぶ（M.A.）
	9月8日	米国ジョージア州ゲインズヴィルの第一バプテスト教会で按手礼を受ける
	9月	米国ケンタッキー州ルイヴィルのサザンバプテスト神学校に入学する
1932	3月	サザンバプテスト神学校を卒業（Th.M.）する
	4月30日	ウィンゲート・バプテスト教会でメアリ・エレンと結婚する
	10月29日	宣教師としての日本への赴任が決定する
	12月	妻 M. E. ドージャーと共に、バージニア婦人宣教連合派遣宣教師として来日する
1933	1月1日	高等学部教授に就任し（1941年3月まで）、英語・倫理・ギリシア語・旧約聖書・宗教教育を担当する 高等学部文科長に就任する（1935年1月17日まで）
	2月10日	バプテスト機関紙『聖戦』33号に「平安の主」を寄稿する
	5月31日	父 C. K. ドージャーが北九州市小倉の自宅にて召天（54歳）
	6月2日	父 C. K. ドージャーの葬儀で遺族を代表して謝辞を述べる
	7月14日	米国南部バプテスト連盟外国伝道局から、妻 M. E. ドージャーと共に、派遣宣教師として正式に任命される
	8月5日	学院理事に就任する（1934年4月27日まで）
	11月10日	『聖戦』42号に「教会と少年」を寄稿する

年	月日	事　　項
1934	4月28日	別府市で開催された日本バプテスト西部組合第32回年会で「目をあげて畑を見よ」と題して講演を行う
	10月20日	『西南学院新聞』7号に「カレッジの思ひ出と制度」を寄稿する
	11月23日	福岡市で開催された第1回全日本大学高専英語弁論大会で審査員を務める
1935	11月8日	京都市で開催された全国基督教教育同盟総会に出席する
	11月14日	中学部の英語研究会で演説を行う
	月日不詳	日本バプテスト西部組合理事を務める
1936	2月15日	『バプテスト（『聖戦』より改題）』69号に「「教育号」に寄せて」を寄稿する
	5月15日	『バプテスト』73号に「癩病癒さる」を寄稿する
	7月	長野県軽井沢町で静養する
	10月26日	長女サラ・エレンが東京で生まれる
	月日不詳	日本バプテスト西部組合主事を務める
1937	3月1日	『バプテスト』82号に「基督者の子弟は基督教学校へ」を寄稿する
	4月10日	『バプテスト』83号に「親となりて」寄稿し、長女の誕生を“何物にも比べられない喜び”と語る
	月日不詳	“The God Idea in Poems of the Emperor Meiji”を発表する
1938	1月9日	福岡JOLK放送局から「御製を通じて拝したる明治天皇の大御心」（The Concept of God in the Imperial Odes of Emperor Meiji）を放送する
	4月5日	高等学部英文科長に就任する（1940年まで） 高等学部神学科長に就任する（1939年まで）
	4月7日	高等学部チャペル講話で日本文化を外国に紹介したいとの抱負を語る
	6月	休暇のため帰米する（1939年8月まで）
	月日不詳	サザンバプテスト神学校で学ぶ（1939年まで）
1939	9月9日	父C. K. ドージャーの遺訓「日曜日を安息日として守る」ことの意義を語る
	月日不詳	母M. B. ドージャーらと共に「バプテスト50年史」の執筆に参加する
1940	1月3日	姫路市で開催された東西バプテスト合同総会に唯一の宣教師として出席する
	7月15日	長男チャールズ・マーヴィンが長野県軽井沢町で生まれる
	月日不詳	*A Golden Milestone in Japan* を Broadman Press から出版する
	月日不詳	学院の経営支援のため、自身が所有する長野県軽井沢町の土地・建物の寄贈を申し出る
1941	4月	第二次世界大戦の勃発により、母M. B. ドージャーらと共に日本を離れる
	5月11日	『西南学院論叢』創刊号に“The Bible as Literature”を発表する
	5月	米国ハワイ州（当時は米国属領、以下同じ）ホノルルに移り、オリベット・バプテスト教会などで日系人等に宣教活動を行う（1946年まで）
	12月	太平洋戦争が始まり、ハワイ州政府嘱託に徴用される（1943年6月まで）
1942	月日不詳	米国ハワイ州のバプテスト聖書学校設立に尽力し、旧約聖書、宗教教育、説教学を教える
1943	6月	ハワイ・バプテスト連盟の創立に参加する
1945	2月27日	次女アデリア・アンが米国ハワイ州ホノルルで生まれる

年	月日	事　　項
1946	10月30日	米国南部バプテスト連盟外国伝道局からの代表宣教師として来日し、東京都世田谷区の熊野清樹氏宅を拠点に、日本での宣教活動を再開する
	11月22日	学院主催帰日歓迎懇談会の席上、40 人程度の宣教師派遣を公約する
	11月23日	「福岡会議」の席上、九州の教会関係者に対して外国伝道局の意向を伝える
	12月	米国南部バプテスト連盟外国伝道局に報告書「ドージャー・レポート」を提出する
	月日不詳	日本基督教団から離脱し、日本バプテスト連盟の誕生に尽力する
	月日不詳	肺炎に罹り 2 か月間静養する
1947	2 月28日	学院理事に就任する（1954 年 4 月 6 日まで）
	4 月 3 日	日本バプテスト連盟が結成される
	8 月 4 日	一般市民を対象としたキリスト教夏期大学講座の講師を務める
	10月30日	休暇のため帰米する（1948 年 8 月まで）
1948	4 月	日本バプテスト連盟副主事に就任し、これ以後、連盟理事（1948 – 1959、1965 – 66）をはじめ、主事、副総主事、特選理事、出版部長、教育奉仕部長などの役職を歴任し、連盟の発展に貢献する（1966 年まで）
	9 月	家族と共に来日し、東京に居住する
1949	3 月13日	伝道を目的とした出版機関「ヨルダン社」を設立する
	4 月	大学非常勤講師に就任する（1958 年まで）
	8 月14日	恵泉バプテスト教会（東京都世田谷区下馬）を組織し、初代牧師に就任する（1951 年 3 月 15 日まで）
	12月	中学校伝道週間の講師を務める
	月日不詳	*Japan's New Day* を Broadman Press から出版する
	月日不詳	長女サラ・エレンが *My Daddy Told Me* を Broadman Press から出版する
1950	1 月	日本キリスト教文書刊行会より『聖書雑誌』を刊行し、発行人として聖書解説を連載する（1951 年 4 月まで）
	6 月 1 日	『アカシビト』20 号に「紙上説教」を寄稿する
1951	4 月20日	『日本バプテスト』5 号に「フォローアップを真剣に」を寄稿し、求道者への積極的なアプローチを求める
	5 月	学院創立 35 周年記念伝道や大学春季キリスト教強調週間の講師を務め、多くの学生・生徒をバプテスマに導く
	7 月 7 日	学院創立 35 周年記念誌に随想「父を語る」を寄稿、父 C. K. ドージャーの面影を回想する
	8 月 1 日	共訳著『個人伝道論』をヨルダン社から出版する
	11月 1 日	編著『聖書教案』をヨルダン社から出版する
1952	3 月 1 日	『アカシビト』42 – 44 号に連載「道者百話」を寄稿する（同年 5 月まで）
	月日不詳	学院長への就任を打診されるも、多忙を理由に固辞する
1953	2 月15日	『アカシビト』53 号に「幸福なるかな悲しむ者」を寄稿する
	5 月 1 日	『アカシビト』55 号に「母の日に贈る」を寄稿する
	11月15日	『アカシビト』59 号に「宇宙を支配する理性者」を寄稿する
1954	2 月15日	『アカシビト』62 号に「万物の原始者」を寄稿する

年	月日	事　　項
1954	5月31日	大学春季キリスト教強調週間の講師を務める
	7月27日	休暇のため帰米する（1955年8月まで）
1955	5月30日	ウェイクフォレスト大学が名誉博士号（D.D.）を授与する
	10月	自身への講演謝礼を充当し、恵泉バプテスト教会にオルガンを寄付する
1956	1月1日	『月刊聖書教育』1月号に「米国南部バプテスト発展の秘けつ」を寄稿する
	5月11日	学院創立40周年記念式典にて自身の記念講演会が開催される
	11月1日	『アカシビト』92号に「人を滅びに至らしめるもの」を寄稿する
	12月	「ドージャー便り」を発行し、友人に近況を報告する（1957年まで）
1957	10月1日	『青年バプテスト』10月号に「青年指導者におくる」を寄稿する
	11月6日	学院理事に就任する（1969年5月10日まで）
1958	2月1日	『アカシビト』107号に「幸いなるかな義のために責められる者」を寄稿する
	6月25日	大学教授に就任し（1969年5月10日まで）、伝道学、教会管理学、説教学を担当する
	7月1日	『アカシビト』112号に「創造の神秘と人格の秘義」を寄稿する
	9月	東京から福岡に移住する
	11月18日	高等学校新聞『SEINAN JOURNAL』40号の紙面インタビューで、生徒に期待する人間像を語る
	月日不詳	田隈伝道所（現在の田隈バプテスト教会）で牧会活動を行う（1965年まで）
1959	2月1日	『青年バプテスト』新年号に「青年の意気に待つ」を寄稿する 『月刊聖書教育』2月号に「教会の中心・教会学校」を寄稿する
	2月25日	心臓麻痺で倒れ、京都バプテスト病院に入院する（同年3月26日まで）
	9月20日	『日本バプテスト連盟史（1889-1959）』の出版に携わる
1960	4月1日	大学短期大学部長に就任する（1963年10月21日まで） 舞鶴幼稚園長に就任する（1963年12月31日まで）
	5月1日	妻M. E. ドージャーが早緑子供の園園長に就任（1963年12月31日まで）し、自身も園の運営を支援する
	7月	休暇のため帰米する（1961年9月まで）
1962	5月10日	学院宗教部長に就任する（同年8月31日まで）
	6月12日	大学春季キリスト教強調週間の講師を務める
	9月20日	共著 *The Missionary and his Work in the Japan Baptist Convention* を発表する
1963	11月6日	舞鶴幼稚園創立50周年記念誌『わたしたちのまいづるようちえん』に、開園当時の自身の回想を寄稿する
	11月	伊豆市で開催された在日宣教団協議会に調査資料報告書“The Mission and The Convention”を提出し、今後の宣教活動に向けた問題提起を行う
	月日不詳	*Christian Evangelism ; Its Principle and Techniques* をヨルダン社から出版する
1965	1月	日本バプテスト女性連合機関紙『世の光』に聖書研究「神よりの委託」を連載する（同年12月まで）
	10月9日	『西日本新聞』夕刊「大学群像」で自身の経歴が紹介される
	11月1日	学院長に就任する（1969年5月10日まで）

年	月日	事　　項
1965	11月	教会教役者向け冊子「僕飼者」を発行する（1968年12月まで）
1966	1月	『学院月報』173号に「年頭挨拶」を寄稿する
	3月16日	『大学宗教部報』2号に「卒業生に贈る」を寄稿する
	4月1日	学院宗教部長に就任する（1967年5月26日から宗教局長に改称、1968年5月31日まで）
	4月	学年始めの中学校職員会議で挨拶し、一同を激励する
	5月2日	『大学宗教部報』4号に「創立50周年を迎えて」を寄稿する
	5月11日	学院創立50周年記念式典で、学院の世界貢献について式辞を述べる 記念誌『西南学院その50年の歩み』に寄稿、今後への決意を語る
	5月12日	高等学校体育館献堂式に出席し「心身ともに健全な若者たれ」と挨拶する
	5月23日	『西南学院新聞』203号紙面に直筆題字「生誕半世紀を迎えて」が掲載される
	7月2日	『同窓会報』22号に50周年記念式典式辞「世界的貢献を目指せ」を寄稿する
	7月	学院職員夏期修養研修会に参加し講師を務める
	8月	中学校職員夏期修養会に参加し講師を務める
	12月12日	『大学宗教部報』8号に「クリスマス」を寄稿する
	12月	『学院月報』184号に「クリスマス・メッセージ」を寄稿する
	月日不詳	有田伝道所（現在の福岡有田バプテスト教会）で牧会活動を行う（1969年まで）
1967	3月25日	『同窓会報』23号に「新入会おめでとう」を寄稿する 『大学宗教部報』9号に「卒業生に贈る」を寄稿する
	5月8日	『大学宗教部報』11号に「創立記念日を迎えて」を寄稿する
	5月	休暇のため帰米する（同年9月まで）
	7月	学院長名を冠した英語暗唱大会「ドージャー杯暗唱大会」が創設される 大学体育会誌『紺碧』創刊号に「巻頭言」を寄稿、運動と勉学の両立を期待する
	10月17日	大学チャペルで「現実の追求」を主題に講話を行う
	12月1日	大学学長代理を務める（1968年2月28日まで） 中学校校長代理を務める（1968年3月まで）
	12月6日	『大学広報』創刊号に「真の対話の場を作ろう」を寄稿する
	12月12日	大学チャペルで「祝祭の祝い方」を主題に講話を行う
	12月	『学院月報』196号に「クリスマス・メッセージ」を寄稿する
1968	1月26日	大学終業チャペルで講話を行う
	4月8日	『大学広報』2号に「意義を求めよ」を寄稿する
	5月28日	『大学宗教部報』16号に「強調週間について」を寄稿する
	6月11日	大学チャペルで講話を行う
	7月4日	『大学広報』3号に「西南の新しい発展のために」を寄稿する
	7月	学院事務部内報『窓』創刊号に「研修と親和の場となるように」を寄稿、事務局への期待を語る
	9月6日	大学チャペルで「基督教主義について」を主題に講話を行う

年	月日	事　　項
1968	10月11日	『大学広報』4号に「建学の精神は何か」を寄稿する
	10月17日	大学チャペルで「私達の祈り」を主題に講話を行う
	10月23日	日本国政府が勲四等旭日小綬章を授与する
	11月15日	大学図書館献堂式に出席し、献堂説教を行う
	11月19日	『大学宗教部報』19号に「REGARDING OUR AUTUMNAL RELIGIOUS FOCUS WEEK」を寄稿する
	11月30日	『同窓会報』25号に「残したい古い建物」寄稿、施設整備への理解を求める
	12月5日	『大学広報』5号に「全学院的視野に立とう」を寄稿する
	12月	『学院月報』208号に「クリスマス・メッセージ」を寄稿する
1969	3月	建学の精神「西南よ、キリストに忠実なれ」を具現化した標語「神と人とに誠と愛を」を公表する
	4月23日	学生運動が激化し、大学1号館の院長室などが封鎖・破壊される
	5月10日	九州大学病院にて召天（61歳）
	5月11日	学院・学院同窓会・田隈バプテスト教会による合同告別式が西南学院バプテスト教会で行われる
	5月12日	西南女学院構内（北九州市小倉）の「西南の森」墓地に埋葬される
	5月20日	学院主催の記念追悼会が大学チャペルで開催される
	6月2日	召天後に発行された『大学宗教部報』22号に「神と人とに誠と愛を」が掲載される
	9月8日	ドージャー文庫1,342冊（和書176冊および洋書1,166冊）が大学神学部に寄贈される
1970	3月	大学卒業アルバムに自身の生前メッセージが掲載される
	5月9日	学院・学院同窓会主催による記念会が開催される
1971	1月14日	『毎日新聞』朝刊紙面に船越栄一学長の抱負「前院長の遺志継ぐ」が掲載される
	4月	斎藤剛毅が“Life,Work, and Contributions of Edwin B. Dozier in Japan”を発表する
1972	1月13日	母M. B. ドージャーが米国にて召天（90歳）
	4月1日	母M. B. ドージャーほか関係者の寄附金を原資とした奨学金「C. K. ドージャー記念奨学金規程」が制定される
1976	4月1日	妻M. E. ドージャーの寄附金を基金として設立された奨学金「M. E. ドージャー奨学金規程」が制定される
1978	7月	『大学神学論集』第36集に、斎藤剛毅「Edwin B. Dozierの日本のバプテスト教会状況報告（1946年）分析」が掲載される
1983	月日不詳	ロイス・ホエリー著 *Edwin Dozier of Japan* がWoman's Missionary Unionから出版される
1986	8月20日	斎藤剛毅著『神と人とに誠と愛を』がヨルダン社から出版される
1999	7月29日	妻M. E. ドージャーが米国にて召天（91歳）
2005	1月15日	妹ヘレン・アデリア・ピーチが米国にて召天（94歳）
2023	10月31日	斎藤剛毅著『神と人とに誠と愛を（第2版）』がキャンパスサポート西南から出版される